旧総合資料館跡地活用に伴う北山文化環境ゾーンの施設整備についての検討報告

平成３０年８月
総合資料館跡地活用等検討委員会

１　趣 旨

北山文化環境ゾーンの北東角に位置する旧総合資料館の跡地について、地域のポテンシャルを最大限に引き出し、ゾーンの魅力を高めた活用が図られるよう検討を進めてきたものである。

２　北山文化環境ゾーン整備の方向性と近年の整備状況

北山地域は、賀茂川などの豊かな自然環境の中、多くの府立施設が集積する府民の憩いの空間であるとともに、「文化と環境が共生する京都」を内外に発信する魅力ある拠点地域として大きな可能性を秘めていることから、平成21年度の「北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告」において、北山地域の街づくりのコンセプト、エリアイメージ、エリアの機能、施設整備の方向性を策定した。

この検討報告では、
・文化と環境に包まれたやすらぎと交流の中で、京都を世界に発信する街
・開放感あふれ、歩いてまわりたくなる街
を街づくりのコンセプトとし、立地する各施設間の有機的連携により、京都の地に相応しい特徴ある知識や知恵・文化等の集積を図ることにより、普遍的な価値や文化・環境の時代に相応しい総合的なエリアとして京都を世界に発信する拠点とすることを目指す。

[これまでの整備の概要]

この間、この検討報告に基づき、ゾーン内の各エリアで、以下の様々な整備を順次進めてきた。

○　「感じる（文化）エリア」（主として北山通に近い地域）と「学ぶ（学術）エリア」（主として北山通から遠い地域）が重なりあう場所には、旧総合資料館と府立大学が連携した京都文化の研究・学習・交流拠点である京都学・歴彩館を整備

○　「学ぶ（学術）エリア」（主として北山通から遠い地域）には、３大学（府立医科大学、府立大学、京都工芸繊維大学）連携による教養教育共同化施設を整備

○　「やすらぐ（環境）エリア」（主として植物園地域）には、植物園の魅力向上のための各種の施設整備や回遊性を高めるための入園門の整備を実施

○　「憩う（親水）エリア」（主として賀茂川沿いの地域）には、植物園との連続性の確保の観点から、北西側の入園門として賀茂川門を整備

○　「ふれあう（交流）エリア」（主として北山通沿いの地域）には、ボタニカルウィンドウなど、植物園の魅力を伝えるふれあいの空間を設置

また、これらの施設をつないでゾーン内の回遊性を高め、人の交流を促進する広場・プロムナードの整備にも着手したところである。

［ 今後の整備 ］

旧総合資料館の跡地は、平成29年度末に旧総合資料館から京都学・歴彩館への機能移転が完了したことから、上記検討報告を踏まえた整備が求められている。

上記検討報告では、同跡地は、「感じる（文化）エリア」と「ふれあう（交流）エリア」が重なりあう場所にあたることから、現在の北山地域にない新たな文化施設の機能整備を図ることで、既存文化施設との相乗効果が期待できるとされており、例えば、舞台芸術系（演劇・舞踊・ダンス等）、視覚芸術系（絵画・写真・工芸・華道・書道等）施設やアートパフォーマンス広場等の整備が適当とされてきた。

また、「ふれあう（交流）エリア」は、北山通から植物園や文化・学術エリアに回遊性を持つ楽しんで交流できるエントランスとしての機能の整備が求められてきた。

これらを踏まえ、新たな施設整備を検討する必要があるが、ゾーンのポテンシャルを十分に引き出すためには、単に同跡地のみでなく、隣接する京都コンサートホール西側の府管理地をはじめとしたゾーン内の土地の一体活用も考慮しながら検討を行うことが必要である。

３　旧総合資料館跡地活用に伴う北山文化環境ゾーンの施設整備に向けて考慮すべき事項

(1) ゾーンのポテンシャルの発揮

ア　ゾーン内の施設には、以下の各施設が立地しており、これらの施設と機能分担しながら相乗効果が期待できる文化施設が必要である。

- 京都コンサートホール … 音響芸術発表の場
- 陶板名画の庭 … 屋外で名作の美しさを鑑賞できる造形芸術
- 京都学・歴彩館 … 京都の歴史・文化に関する研究・交流拠点
- 府立大学 … 学術・研究発信拠点
- 教養教育共同化施設 … 三大学の交流連携拠点
- 植物園 … 緑に囲まれた府民の憩いの場

イ　北山地域は、「現代性」、「国際性」など、京都の中で他にはないハイセンスで自由なイメージを持つ地域であり、その特性を考慮した施設整備が必要である。

ウ　京都学・歴彩館のグランドオープン（平成29年４月）や府立大学文学部和食文化学科の開設（平成31年４月）など、ゾーンにおける新たな知の創造・発信拠点との連携を考慮することが必要である。

エ　ゾーン周辺地域には、国立京都国際会館や、多くの大学・研究機関が立地しており、これらの施設との相乗効果の発揮を考慮することが必要である。

オ　ゾーン内の個々の施設は高いポテンシャルを持っているが、相互の往来や連携した取組が未だ十分とはいえないことから、新たな施設整備にあたっては、各施設間のハード・ソフト両面での有機的連携の一層の促進やオープンスペースを含めたゾーン内の土地の有効活用等を考慮することが必要である。

(2) その他の考慮すべき事項

ア　岡崎地区や梅小路地区など京都市内の他の文化ゾーンや既存の文化施設との機能分担や相乗効果の発揮を考慮することが必要である。

イ　近年、民間の演劇施設の減少により、舞台芸術の創造・発表の場の需要が高まっている状況を考慮することが必要である。

ウ　近年の関西圏におけるインバウンドの増大と、その関心が「モノの消費」から「コトの消費」に移行していることによる魅力的な文化施設のニーズが高まっていることを考慮することが必要である。

エ　府民の文化芸術の創造・発信拠点である文化芸術会館、京都こども文化会館など、既存文化施設の老朽化が進んでおり、これらの機能の継承について留意が必要である。

4　旧総合資料館跡地活用に伴う北山文化環境ゾーンの施設整備の方向性

ゾーン内の各施設及び京都市内の他地域の施設との機能分担、さらには文化芸術会館等の機能継承の必要性等を考慮すると、平成21年度の検討報告に掲げられた舞台芸術系・視覚芸術系施設が求められている点については、現在でもその状況は変っていない。

さらに、今回の新たな整備により、北山文化環境ゾーンが京都を世界に発信する拠点となるためには、国内外の人々を呼び込み、ゾーン内を周遊させ、さらにその滞在時間を延ばし、交流を活性化させることが重要である。

そのためには、例えば、ゾーンに立地する既存施設をはじめ、周辺の国立京都国際会館や多くの大学・研究機関等の施設と連携した国際会議や学会の開催のほか、観光等で京都を訪れた国内外の人々が、ゾーン内に滞在しながら、芸術を鑑賞したり、豊かな自然の中でくつろいだり、京都の歴史・文化に触れるとともに、飲食を楽しみながら多様な人々との交流を深めるなど、様々な体験ができるといった機能も必要である。

実現に向けては、文化施設を単体で整備するのではなく、人を引きつける催し・イベント等、魅力的でおもしろい体験ができる機会の創造や、コンベンション、宿泊、飲食等も含めた様々な機能を提供することによりゾーンの魅力を高めることも検討されるべきである。

更に、同跡地の活用に際しては、オープンスペースも含めゾーン内の土地を有効に活用しながら、既存施設との相互利用や一体活用など、ハード・ソフト両面

でのボーダレスな連携を行うことにより、ゾーン全体のポテンシャルを引き出すことが重要であり、そのためにはゾーン全体を統一的にマネジメント、プロデュースする仕組みが必要である。

(1) 求められる施設の機能

この方向性を踏まえ、旧総合資料館跡地活用に際して、北山文化環境ゾーンには以下に掲げる機能を備えた施設の整備が必要である。

○　舞台芸術系（演劇・舞踊・ダンス等）・視覚芸術系（絵画・写真・工芸・華道・書道等）が集積した、京都の他の施設にはない交流・創造・発表の機能

○　周辺地域も含め、コンベンション、宿泊、飲食施設等の集積や、魅力的なイベントの開催等、賑わい・交流機能

○　ゾーンのエントランスに相応しい、また、誰もが自由に使える「広場」機能

(2) 整備にあたっての留意すべき事項

北山文化環境ゾーンの魅力を高め、内外から多様な人が集い、滞在し、交流することを通じ、新たな京都文化の創造拠点として、また、京都を世界に発信する場となる街を目指す。

そのため、施設の整備にあたっては、以下の事項への留意が必要である。

○　施設の整備・運営にあたっては、行政単独ではなく、ＰＰＰ（Public-Private Partnership）をはじめ、民間等様々な主体のアイデアやノウハウ等を活用しながら、最適な手法で行うことが適当である。

○　エリアマネジメントや総合的なプロデュースを持続的に行うことが必要であり、そのためには核となる専門人材の配置や様々な主体との連携に留意すべきである。

○　施設整備においては、設備・機構や搬入導線等に専門家の意見を反映させるなど、多機能でフレキシブルな将来にわたって使い勝手のよい施設となるよう留意すべきである。

○　新たな文化芸術の創造・発信に向け、多様なキャパシティーを有し、他施設との相互利用が可能となるよう留意すべきである。

総合資料館跡地活用等検討委員会委員名簿

（五十音順・敬称略）

氏　　名	役　　職　　等	任　期
○天　野　　文　雄	京都造形芸術大学舞台芸術研究センター所長	H28.1.29～現在
○木　下　　博　夫	前国立京都国際会館館長	H28.1.29～現在
金　田　　章　裕	府立京都学・歴彩館長	H28.8.29～現在
築　山　　崇	京都府立大学学長	H28.8.29～現在
○佐々木　　雅　幸	同志社大学経済学部特別客員教授	H28.1.29～現在
○田　井　　祥　文	北山街協同組合理事長	H28.1.29～6.1
○高　橋　　信　也	森ビル株式会社顧問兼森美術館顧問	H28.1.29～現在
小　林　　香	舞台演出家	H28.8.29～現在
○デービッド・アトキンソン	株式会社小西美術工藝社代表取締役社長	H28.1.29～現在
○中　野　　淑　夫	公認会計士	H28.1.29～現在
○並　木　　誠　士	京都工芸繊維大学教授・美術工芸資料館長	H28.1.29～現在
野　中　　修　一	北山街協同組合理事長	H30.7.12～現在
○羽　田　　登	京都工芸美術作家協会理事長	H28.1.29～現在
○柾　木　　良　子	北山街協同組合専務理事	H28.6.2～H30.1.28
椋　平　　淳	大阪工業大学工学部教授	H28.8.29～現在
○門　内　　輝　行（委員長）	大阪芸術大学芸術学部教授	H28.1.29～現在

※　○は北山文化環境ゾーン未来構想委員会委員であった者

検討経過

北山文化環境ゾーン未来構想委員会

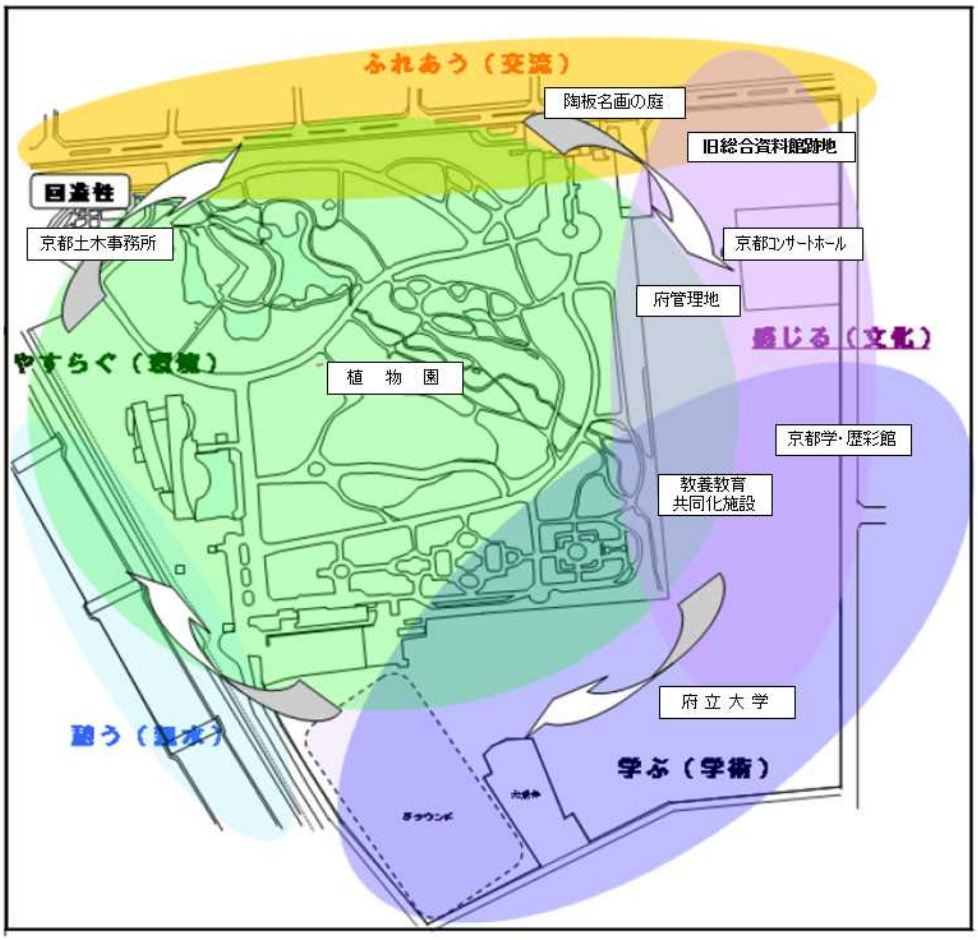
平成28年１月29日	第１回会議	整備のコンセプト・視点の検討
平成28年６月２日	第２回会議	想定される施設の機能・分野、整備手法等の検討

総合資料館跡地活用等検討委員会（北山文化環境ゾーン未来構想委員会を拡充・再編）

平成28年８月29日	第１回会議	具体的な施設整備の方向性の検討
平成30年７月12日	第２回会議	これまでの検討結果の整理、取りまとめ案の検討
平成30年７月26日	第３回会議	検討報告取りまとめ

＜ 参　考 ＞

■「北山文化環境ゾーン整備推進についての検討報告」におけるエリアイメージ図



■北山文化環境ゾーンのエリアイメージ と近年の整備状況

・感じる（文化）
　人々が活発な交わりの中で心を遊ばせる空間 …… 主として北山通に近い地域
　＜整備＞　→　舞台芸術系、視覚芸術系施設、京都学・歴彩館
・学ぶ（学術）
　人々が知的な刺激の中で思索を深める空間 …… 主として北山通から遠い地域
　＜整備＞　→　京都学・歴彩館(再掲)、教養教育共同化施設
・やすらぐ（環境）
　人々が花と緑に抱かれて心を取り戻す空間 …… 主として植物園地域
　＜整備＞　→　植物園の魅力向上に向けた整備、賀茂川門・北泉門整備
・憩う（親水）
　人々が水の流れを前に心を休める空間 …… 主として賀茂川沿い地域
　＜整備＞　→　賀茂川門整備(再掲)
・ふれあう（交流）
　人々がおしゃれな街並みの中でふれあいに心を弾ませる空間
　…… 主として北山通沿い地域
　＜整備＞　→　植物園ボタニカルウィンドウ整備

■総合資料館跡地活用等検討委員会で出された附帯意見

○　ゾーン全体の回遊性を高めるためには、北山通からの南北軸の整備に加え、東西軸も意識して今後のグランドデザインを検討することが必要である。

○　ゾーンの魅力向上のためには、旧総合資料館跡地のみではなく、府立大学のグラウンドの修景・府民貸出等も含め、ゾーン内の土地の利活用について幅広く議論していく必要がある。

○　北山地域には自動車で訪れる人も多く、ゾーンの賑わいの創出のためには駐車場の整備が不可欠である。

○　ゾーン全体で、夜の時間帯も活用が図れるような統一的な行動時間帯の設定が必要である。

○　京都には優れた美術工芸品が数多くあり、京都府も京都市も数多くの優品を所蔵しているが、それらを常時展示している施設がないことから、京都の優れた美術工芸品を常時展示し、その良さを府民に伝えられる施設が必要である。

○　陶板名画の庭については、絵画を転写した陶板を展示する施設であり、展示内容に変化がないことから、今後の展開について検討が必要である。

○　施設の整備にあたっては、将来府の財政負担が過大にならないような収支計画の検討が必要である。